

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 基礎篇第五課 なにを しましたか：動詞

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002784">https://doi.org/10.15084/00002784</a>

日本語教育映画解説 5

基礎篇  
第五課

なにを しましたか

—動詞—

国立国語研究所

## 前 書 き

国立国語研究所では、昭和49年度以来、日本語教育部ついで日本語教育センターにおいて、日本語教育教材開発事業の一環として日本語教育映画基礎篇を作成してきた。これは従来、文化庁において進められていた映画教材作成の事業を新たな形で引き継いだものである。

日本語教育映画基礎篇は、各課5分の映画にそれぞれ完結した主題と内容を持たせ、それを教育の必要に応じて使用する補助教材、また、系列的に初級段階の学習事項を順次指導する教材として提供しようとするものである。

映画の作成にあたっては、原案の作成・検討から概要書の執筆まで、また、実際の制作指導においても、日本語教育映画等企画協議会委員の方々に御協力頂いた。ここに厚く御礼申し上げる。

この解説書は、映画教材の作成意図を明らかにし、これを使用して学習し、指導する上での留意点について述べたものである。この解説書がこの映画教材の利用を一層効果あるものにするを願っている。この第五課「なにをしましたか」の解説は、日本語教育センター日本語教育教材開発室日向茂男の執筆によるものである。

昭和54年3月

国立国語研究所長

林 大

## 目 次

1. はじめに	1
2. この映画の目的・内容・構成	2
2.1. 目的・内容	2
2.2. 構成——場面を中心として	5
2.3. 語句, 語法, 文型	21
3. この映画の効果的な利用のために	29
3.1. 動詞の導入にあたって	29
3.2. 語彙の拡充	33
3.3. 練習問題	35
3.4. 映画場面を使つての練習	43
3.5. 進んだ段階での利用法	44
4. おもな参考文献	45
資料1. 使用語彙一覧	49
資料2. シナリオ全文	64

## 1. はじめに

この日本語教育映画基礎篇は、初歩日本語学習期における視聴覚補助教材として企画・制作されたもので、この映画「なにをしましたか」は、その第五課にあたるものである。

この映画の企画、概要書（シナリオ執筆のための最終原案）の執筆等に当たったものは、次の通りである。

昭和50年度日本語教育映画等企画協議会委員（肩書きは当時のもの）

池尾 スミ	アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター専任講師
石田 敏子	国際基督教大学専任助手
今田 滋子	国際基督教大学助教授
川瀬 生郎	東京外国語大学附属日本語学校教授
木村 宗男	早稲田大学語学教育研究所教授
窪田 富男	東京外国語大学教授
斎藤 修一	慶応義塾大学国際センター助教授
佐久間勝彦	アメリ・カカナダ十一大学連合日本研究センター専任講師

日本語教育部（当時）関係者（肩書きは当時のもの）

林 大	日本語教育部長・事務取扱
武田 祈	日本語教育部日本語教育研修室長
日向 茂男	日本語教育研修室研究員
水谷 修	日本語教育研究室長

この映画「なにをしましたか」は、窪田富男委員の原案に協議委員会で検討を加え、概要書にまとめあげてから制作したものである。制作は、日本シネセル株式会社が担当した。概要書のシナリオ化、つまり脚本の執筆には同会社の前田直明氏があたり、同氏はまたこの映画の演出を担当した。言語演

出の面では、協議会委員及び日本語教育部（当時）関係者の意見が加えられている。

本解説書は、日本語教育センター日本語教育教材開発室の日向茂男が執筆したが、企画・制作にあたっての意図が十分生きるよう努めた。

現在、この映画は、より多くの人の利用の便をはかって下記の九か所において貸し出しを行っている。

- 北海道教育庁指導部社会教育課視聴覚教育係
- 宮城県教育庁社会教育課
- 都立日比谷図書館視聴覚係
- 愛知県教育センター企画管理課
- 京都府教育庁社会教育課
- 大阪府教育庁社会教育課
- 兵庫県教育庁社会教育・文化財課
- 広島県教育庁社会教育課
- 福岡県視聴覚ライブラリー

なお、この映画はそのビデオ版とともに上記制作会社が販売している。

## 2. この映画の目的・内容・構成

### 2.1. 目的・内容

この映画「なにをしましたか」は、動詞の導入を主要目的とした作品である。ただし、人物、事物の存在を表わす言い方は別の課（第二課、第四課）で扱っているので、その他の、人物、事物の動作・作用等を表わす動詞一般がここで扱われている。動詞の導入にあたっては、動詞学習上のさまざまな問題——ひとつひとつの動詞が表わす意味・概念の理解から始まって、文中での用法や活用の理解、また同時学習を要求される格助詞等の理解、等——をどう整理し、どう段階づけ、どこを導入とし、その後の発展的学習にどう

結びつけていくかが大事な問題となる。

ここでは動詞の導入にあたって次のような点を主要学習項目とした。

- (1) 一般の初級教科書で多く取り上げられている一般的・代表的な動詞の意味・概念の理解
- (2) 動詞述語部の理解——「動詞+ます」形の用法の理解
- (3) 連用修飾成分の理解——連用修飾成分の中でも特に、動作・作用の働きの及ぶ対象語や「時」及び「場所」関係の言い方の理解
- (4) 以上の(1)(2)(3)を土台にしての動詞述語文の理解

以上四点の中でも動詞学習の出発点として、(1)は極めて大事である。

「\_\_は\_\_です」の句型学習の際に一般的、典型的な事物の提示を通じて、まず事物の名称の学習をするが、その場合と同じように動詞の理解の第一歩も、その動詞が意味する動作・作用を事物の一般的、典型的な“動き”を通じて理解することである。あるいは逆に、事物の一般的、典型的な“動き”を見て、その“動き”をどう表現するのか学習することである。この点では事物の連続した“動き”を見せることのできる映像教材は、他の、印刷教材や音声教材より数段優れているといえよう。この日本語教育映画基礎篇の主たる役割が、まず補助教材であることに求められるとするなら、この点だけでも主教材の足りない部分を十分に補い得るものといえよう。

さて、事物そのものの提示と事物の動作・作用の提示では同じ映像化といってもそこには大きな違いがある。それは後者の場合はその“動き”にテンスやアスペクト等の問題がからんでくるからで、前者の場合ほど単純明解にはいかないからである。そこでこの段階での動詞の理解は、そうした問題を一応度外視した「超時的」、中立的なものとなる。この中立的なものは、通常、動詞の終止形か「動詞+ます」の形で示されるが、ここでは後者の形が採用されている。

次に、動詞述語部の理解へと進むことになるわけだが、ここでは動詞の導入にあたって今述べた「動詞+ます」の形を基本的な形とし、「ます」と「ます」の変化形（以後、動詞部分も含め単に「ます」形と呼ぶ）によって作ら

れる次の四種類の言い方と用法を学習する。

	肯定形	否定形
現在形	_____ます	_____ません
過去形	_____ました	_____ませんでした

〔「現在形」「過去形」という名称は、説明の便宜のためのもので暫定的名称である。またここでは、「肯定形」「否定形」との組み合わせで、「現在肯定形」とか「現在否定形」という言い方をすることもある。〕

ここで、「ます」形をひとまずそのまま動詞として扱っておくか、あるいは始めから終止形（または連用形）との関連で取り扱うかは、教授者の置かれた教育環境や教授者自身の考えによって決まってくる。

「ます」形の用法の理解に続いて大事なものは、連用修飾成分の学習である。ここでは、動作・作用の働きかけが及ぶ対象語や「時」「場所」関係を表わす連用修飾成分の学習を取り上げ、他に、手段・方法についての言い方にも触れている。

この連用修飾成分の学習に進むためには、その基礎学習として基本的な格助詞の代表的な用法の学習が必要である。そして格助詞の学習は、どのようなタイプの動詞を、どのような段階づけで取り上げ、どう学習を進めていくようにするか、と深くかかわっている。

なお、この解説書では説明の便宜上、たとえば「バスを」という形で「を」を取扱ったり、「を降りる」という形で「を」の説明を進めたりする。ここでは助詞論には深入りしない。

以上、(1)では動詞の語レベルでの問題、(2)では「ます」形の問題、(3)では連用修飾成分の問題に簡単に触れたわけだが、これらが総合されて動詞述語文全体の理解へとつながっていく。

今まで述べてきたような学習の目的・内容に即して、企画の段階では次のような点を考慮した。

- (1) 動作・作用等、動詞の表わす意味・概念を一般的、典型的に映像化す



るため、なるだけ客観的に“動き”を描写し、それをナレートする方法を取り入れる。

- (2) 動作・作用の及ぶ対象語や、また「時」「場所」関係の状況を示す語、つまり連用修飾成分を人物の“動き”との関連でわかりやすく映像化する。
- (3) 「現在形」「過去形」を対比的に描き、その理解を強めるため、「現在の動作・作用等を過ぎ去った「過去」のものとして振り返る時点を設定し、それを映像的に処理する方法を取り入れる。

なお、この課では動詞の学習の他に大事な学習項目として「時」の言い方が取り上げられている。これには、「\_\_\_\_です」の文型を用いて表現される「時刻」の言い方（例「七時です」）、それから「時間」の言い方（例「十分かかります」）の二つがあるが、後者はもちろん動詞述語文で表現されるものである。

## 2.2. 構成——場面を中心として

2.2.1. この映画での場面や言語表現については、以下の通り扱うことにする。

1. 映画の構成に従って、場面を分ける時にはⅠ、Ⅱ、Ⅲ……のようにし、それを更に小場面に分ける時には、Ⅰ-1、Ⅰ-2、Ⅰ-3……のようにする。
2. 言語表現については、文単位で①②……のように通し番号をつける。文を変形引用する時には、'の印をつけ、①'②'……のようにする。変形引用がふたつ以上ある時には、'''''……の順で'を重ねていく。
3. なお、この映画中に表われていない文や語句を例示する時は、〔 〕付きの番号をつけ、その変形引用には(2)の場合同様'印をつける。文や語句の束で例示する時も出現順に通し番号にする。

以下の言語表現の扱いについては、文単位の認定に多少問題のあるところもあるかもしれないが、ここでは積極的にはその問題に触れない。なお、①②……の文番号は、使用語彙一覧で引用される文やシナリオ全文でのものと

共通である。

2.2.2. この映画は、まずナレーションの部分と対話の部分に大きく二分できる。しかし場面的にみた場合は、前半のナレーションの部分は二つの大きな場面から成り立っていると考えた方がよいので、三つの場面を考えることにする。

場面Ⅰは、ある学生寮である。学生寮のある一室に寝起きを共にする前田さん、加藤さんという二人の学生の行動（夜寝て、朝起きて、食事をする）がナレーションの形で対比的に描かれている。

場面Ⅱは、前田さんの行動に焦点を当て、前田さんが寮を出て学校に着くまでの行動をナレーションで描いている。

場面Ⅲは、学校の教室である。ここでは、映像及びナレーションによって描かれた場面Ⅰ、Ⅱの前田さんの行動が、教師と前田さんの対話の形で描かれる。つまり、前田さんの過去の行動についての質問応答がなされるわけである。

場面Ⅰ、Ⅱの動作描写では、動詞の現在形の理解が中心になるが、これはまず「超時的」に理解し、そして個々の用例の説明でそれが単に動作を叙述するものであったり、(近)未来の動作を表わすものであったり、また習慣的動作を表わすものであったりすることに理解の幅を広げていく方法を取るのがよいだろう。

場面Ⅲは当然のことながら、動詞の過去形の学習が中心になる。

以上の映画構成は、2.1.で述べたこの映画の目的・内容や企画上の考慮が十分生きるように考えられたもので、また学生寮、通学風景、学校の教室という具体的場面の設定は、日本語学習者になじみやすい場面の設定を、という考慮から生まれたものである。

## I 学生寮で

二人の学生、前田さんと加藤さんの行動が対比的にナレーションで描かれていく。このナレーションに即しながら、二人の行動がどう言語表現される

か、が理解できればよい。

### I-1 前田さんと加藤さんの部屋で——夜

まず、二人の学生が紹介される。二人は机に向かって勉強している。やがて前田さんは寝る。

- ① 十一時です。
- ② 前田さんは寝ます。
- ③ 加藤さんはまだ寝ません。

ここで使用されている動詞は「寝る」である。「寝る」という語で表わされる動作の意味の理解、そしてその現在形による肯定、否定の言い方と用法の理解がここでの学習のねらいである。「寝ます」「寝ません」は、②③で対比的に描かれるが、主題の提示である「前田さんは」「加藤さんは」自体は、それほど強い対比的意味を持っていない。

①は「\_\_\_\_です」の文型を用いた「時刻」の言い方。「今」や「ちょうど」を補って、

- ①' 今十一時です。

とか

- ①'' ちょうど十一時です。

とか言える。

「時刻」の言い方を連用修飾成分にして②③の文中に入れると、

- ②' 前田さんは十一時に寝ます。
- ③' 加藤さんは十一時に(は)寝ません。

となる。

②での「寝ます」は、これから先起こる動作を言ったものだが、机に向かっていた前田さんが時計を見て「ああ、もう十一時か、寝なくては……」と思った時等には、「もう」を追加して、

- ②'' 前田さんはもう寝ます。

と言える。また②'に「毎日」や「いつも」をつけ加えて、

②''' 前田さんは 

毎	日	
い	つ	も

 十一時に寝ます。

と言うと、習慣的な動作，でき事を表わすことになる。③'も同様に、

③'' 加藤さんは 

毎	日	
い	つ	も

 十一時に(は)寝ません。

と言える。こうして現在形の用法からしだいに動詞の学習が導入されていくことになる。

③は表現としては②の否定的表現であるが、全く加藤さん自身の行動に即して言えば、

〔1〕 加藤さんは勉強しています。

ということになろう。現象として起こる“動き”それ自体を見つめていれば、世の中に否定ということはない。否定には、ある“動き”に対しこちらはそういう“動き”はしないという判断が含まれる。映像は“動き”の否定そのものを描くことはできないが、映像の流れからその意味をくみ取ることにはできよう。

また“動き”それ自体に注目するとなると、ナレーション以外のさまざまな表現が生まれてくる。前田さんの行動を追ってみただけでも、机に向かって勉強しているところからベッドに着くまでのさまざまな行動がある。一歩進んだ学習段階では、ナレーションにとらわれることなく学習上有効なものを取り出す工夫が必要になろう。

## I-2 前田さんと加藤さんの部屋で——朝

朝が来て、前田さんは起きるが、加藤さんはまだ寝ている。

④ 七時です。

⑤ 前田さんは起きます。

⑥ 加藤さんはまだ起きません。

ここで使用される動詞は「起きる」である。「起きる」という語で表わされる動作の意味の理解，そしてその現在形での肯定，否定の言い方と用法の

理解がここでの学習のねらいである。

④⑤⑥は、場面 I-1 の①②③に全く対応している。動詞が「寝る」から「起きる」に変わっただけである。I-1 の場合と同様に考えていくと次のような文が生まれてくる。

④' 今七時です。

④'' ちょうど七時です。

⑤' 前田さんは七時に起きます。

⑤'' 前田さんはもう起きます。

⑤''' 前田さんは 

毎日 いつも
-----------

 七時に起きます。

⑥' 加藤さんは七時に (は) 起きません。

⑥'' 加藤さんは 

毎朝 いつも
-----------

 七時に (は) 起きません。

また〔1〕の場合同様、加藤さん自身の行動に即して言えば、

〔2〕 加藤さんは寝ています。

という表現が生まれてこよう。

学習段階によっては、次の言い方も同時に学習されてよいだろう。

⑤'''' 前田さんは早く起きます。

⑥'''' 加藤さんは遅く起きます。

I-1, I-2 を通じて「寝る」「起きる」という自動詞をペアーにして、その現在形の肯定形と否定形の用法が学習された。

動詞の導入にあたり、「寝る」「起きる」をペアーにして学習することは、二、三の点で都合がよい。まず、その意味・概念がつかまやすいこと、連用修飾成分を伴わず簡単な文が構成できること、現在形の用法を教えやすいこと、また「ます」の作り方を教えるとするなら一段動詞から始めた方がよいこと、等。「寝る」「起きる」と同様に動詞の導入にあたり、ペアーとして扱われる動詞に「行く」「来る」があるが、「行く」「来る」の方が全ての点で幾らか複雑になる。

### I-3 朝の食堂で

洗面を済ませた後、前田さん、加藤さんは食堂で朝御飯を食べる。

- ⑦ 前田さんはパンを食べます。
- ⑧ ミルクを飲みます。
- ⑨ 加藤さんはみそしるを飲みます。
- ⑩ 御飯を食べます。

ここで使用される動詞は、「食べる」「飲む」である。⑦⑧では前田さんについて、⑨⑩では加藤さんについて、それぞれ二人の「食べる」「飲む」という動作が描かれているが、まず映像を通じてこの二つの動作の意味、また両者の意味の相違が理解できよう。しかし、それだけでは不十分である。「食べる」「飲む」という動作には、「寝る」「起きる」の場合と違ってその動作の働きかける対象が必要であり、当然のことながらその対象物も映像として同時に提示されている。言語表現としては「\_\_\_\_\_を」で示される部分で、この連用修飾成分の言い方と用法の理解が、ここでの第二の学習項目である。

ここではこの新しい学習項目が加わっているため、肯定、否定の関係で二人の動作を対比的に描くのではなく、「加藤さんは、こうする」「前田さんは、こうする」という二人の動作それ自体の対比で描かれている。なお、⑧⑩はそれぞれ直前の⑦⑨で動作主が明示されているため、「\_\_\_\_\_は」の部分が繰り返されず、省略されている。

⑦⑧⑨⑩をもとにして現在否定形の学習も同時にしようとするれば、一例として次のような表現がある。

- ⑦' 前田さんは御飯を食べません。パンを食べます。
- ⑧' みそしるを飲みません。ミルクを飲みます。
- ⑨' 加藤さんはパンを食べません。御飯を食べます。
- ⑩' ミルクを飲みません。みそしるを飲みます。

また、⑦⑨を習慣的な動作として表現すれば、

⑦'' 前田さんは 

毎	朝
い	つ
つ	も
時	々

 パンを食べます。

⑨'' 加藤さんは 

毎	朝
い	つ
つ	も
時	々

 みそしるを飲みます。

と言える。⑧⑩についても同様である。

以上、場面Ⅰ-3では「食べる」「飲む」という他動詞をペアーにして、その動作の働きが及ぶ対象についての言い方にまで学習の範囲を広げた。

## Ⅱ 通学——学生寮から学校まで

場面Ⅰと異なり、ここからは前田さんの行動が中心になって場面が展開していく。ナレーションに即しながら、それぞれの動作がどう言語表現されるか、理解できればよい。ただし、場面Ⅱでは連用修飾成分の種類がぐっと多くなり、動詞との同時学習が求められることになる。

### Ⅱ-1 寮を出る

前田さんは新聞を見ようとしたが、時間がないためやめにし、自室で登校の準備をし、寮を出る。

⑪ 前田さんは寮を出ます。

⑫ 八時です。

⑪の「出る」という動詞は、⑫の「入る」という動詞とペアーにして学習するのがよいだろう。「\_\_を出る」「\_\_に入る」の形で学習することになるが、前者の「を」はⅠ-3で学習した「を」とは違い、動作の出どころ、出発点を表わすものである。後者の「に」は「ある」「いる」学習の際、取り上げた場所そのものを示す「に」とは違って、動作の入りどころ、到達点を示すものである。

⑪の現在形は単に前田さんの動作を叙述したものと言えよう。⑪と⑫を合成すれば、すでに何度か触れたように、

⑪' 前田さんは八時に寮を出ます。

となる。

## II-2 バス停留所へ

寮を出た前田さんは、バス停留所まで歩いていく。

⑬ 前田さんはバスで学校へ行きます。

⑭ 毎朝ここでバスに乗ります。

⑬の「行く」は、目的地・目標へ向かって進む動作を表わす動詞で、その目的地・目標は「\_\_へ」で表わされる。「行く」は「来る」との対比でその意味用法が理解されなくてはならないだろう。

⑭の「乗る」は、「入る」「出る」と同様に「乗る」「降りる」でペアをなす動詞で、それぞれ到達点を表わす「\_\_に」、出発点を表わす「\_\_を」を伴って表現される。

以上の説明は、

⑬' 前田さんは学校へ行きます。

⑭' バスに乗ります。

という二文についてのもので、実際の⑬⑭には他にそれぞれ「バスで」「ここで」というもうひとつの連用修飾成分がある。⑬「バスで」の「で」は手段・方法を表わし、⑭「ここで」の「で」は動作・作用の行われる場所を表わす。

⑬⑭にはそれぞれ二つの連用修飾成分があるわけだが、理解の順序としては、⑬では「学校へ行く」「バスで行く」を学習して「バスで学校へ行く」に進み、⑭では「バスに乗る」「ここで乗る」を学習して「ここでバスに乗る」に進む、ということになるだろう。

なお、⑭の「で」の用法は広く、たとえば、

⑦''' 前田さんは食堂でパンを食べます。

のように言える。この「で」の用法は、「\_\_にある/いる」の「に」の用法との対比で十分学習されなくてはならないだろう。



⑬⑭は、前田さんの毎朝の習慣的動作について述べたものでその実際の動作は映像で描かれていない。「バスで行く」は、次の⑰から⑱までの間の動作であり、「バスに乗る」は⑰で直接描かれる動作である。ここでの実際の行動に即して言えば、

〔3〕 前田さんは歩いています。

〔4〕 前田さんはバスを待っています。

ということになる。

### II-3 バスで学校へ行く

バスが来て、バスに乗り、学校へ行く。学校の近くでバスを降りる。

⑮ バスはまだ来ません。

⑯ バスが来ました。

⑰ バスに乗ります。

⑱ バスを降ります。

⑮⑯では「来る」を、⑰⑱では「乗る」「降りる」を学習する。⑮⑯での「来る」ものはバスである。「来る」は、「行く」がある目的地・目標に向かって進むことを表わすのに対し、向こうからこちら（例えば、自分のいるところ）へと近づいてくることを表わす動詞である。今、バス停にいる前田さんの方へとバスがやってくるのが「来る」である。

⑮はその現在否定形の言い方。⑯はバスが着いた時の言い方。⑯ではそのため「来ました」と「ます」形のうち過去肯定形の「ました」が用いられている。バスが到着したことの表現としては、

⑯' バスが着きました。

でもよい。

今、⑯はバスが着いた時の言い方と説明したが、実は待っているバスが遠くの方に見え、近づいてくる時にそれを認める立場から「(あっ、) バスが来ました。」と言える。その場合、「来ました」は完了直前の動作を表現しているものと言えよう。

ここは映像としてはバスの到着があり、それと同時に⑬のナレーションが入っている。

この「来ました」の学習にあたっては、場面Ⅲでの過去形の学習と関連させながら、この映画教材を用いる時の学習者の動詞の学習度にあわせて説明の軽重を処理するべきだろう。場面Ⅰ，Ⅱを通してナレーション部分で「ました」が用いられているのは、この一か所だけである。

⑬の表現にはもうひとつ問題がある。それは「バスが」の「が」である。これは、⑭の表現「バスは」との対比で理解できる。⑭では、学校へ行くバスなら特にどのバスということもなくバス一般を指していると考えてよいが、⑬では、前田さんが向こうから来るのを見たそのバスを指していると言える。⑬の文は前田さんの目に映った現象を叙述したものであるが、それに対して⑭の文はバスの到着・不到着に関して判断を述べたものである。また、バスの到着・不到着を問う質問文に対して、肯定的応答なら⑬で、否定的応答なら⑭で答えられる、という関係がある。つまり、⑭の否定的表現は⑬というわけである。

動詞の導入を主要目的としたこの課では、動詞述語部の理解に重点を置いて「は」「が」の問題は慎重に避けてきたわけだが、ここをきっかけとして「は」「が」の問題に触れていくこともできよう。あるいは、最初から⑬を別扱いにしておいてもよいだろう。

⑮⑯は前田さんの動作について単に叙述したもの。⑮⑯で「乗る」「降りる」の意味用法がはっきり理解できよう。

#### Ⅱ-4 バスを降りて学校まで歩く

バスを降りた前田さんは学校まで歩き、自分の教室にちょうど九時十分前に着く。

⑮ 学校まで歩きます。

⑯ 教室に入ります。

⑮では「歩く」、⑯では「入る」が取り上げられている。「歩く」は「行く」

と違って自分の足で先へ進むという動作を表わす動詞である。

ここでは「歩く」と同時に「まで」の用法が学習項目になる。「へ」が動作の行き先を表わすのに対し、「まで」は動作の及ぶ範囲・限界を示している。「まで」は動作の出発点を示す「から」とともに、

⑱' バス停留所から学校まで歩きます。

と言える。

⑳の「入る」は、すでに触れたように⑪の「出る」とペアーにして学習するのがよい。

{ ⑪'' 寮に入ります。

{ ⑪''' 寮を出ます。

{ ⑳ 教室に入ります。

{ ⑳' 教室を出ます。

ここで「に」「を」の学習が重要なことは、重ねて言うまでもない。

以上、場面Ⅱを通じて学習した動詞は次の通りである。「出る」「行く」「乗る」「来る」「降りる」「歩く」「入る」

また、格助詞「を」「で」「へ」「に」「まで」の用法が取り上げられた。

### Ⅲ 教室で

場面は学校の教室である。朝の教室が紹介され、先生と前田さんの対話に移っていく。ここでは先生はもっぱら質問する人、前田さんは答える人という役割である。話題は、前田さんの昨夜から今朝学校に着くまでの行動。この行動は場面Ⅰ、Ⅱでナレーションで言われたものばかりとは限らないが、全て映像を通じて描かれた行動である。この行動を教室にいる今を現在とすることで過去としてとらえ、それを先生と前田さんの対話で追った。映像の点では、過去の行動を全てセピア色のスチール（静止画像）で再現した。

ここでの中心学習項目が「ます」形のうち「\_\_\_\_ました」「\_\_\_\_ませんでした」にあることは言うまでもない。

場面Ⅲは、初級日本語学習教室ではよく見かける風景である。ここでは先

生、前田さんの対話を話題により小場面に分け、以下、検討を進めていくことにしたい。

### Ⅲ-1 昨夜、就寝するまでの行動を話題にして

教師「⑲前田さん、ゆうべ何をしましたか。」

前田「⑳勉強をしました。」

教師「㉑何の勉強をしましたか。」

前田「㉒数学の勉強をしました。」

教師「㉓何時から何時まで勉強しましたか。」

前田「㉔九時から十一時まで勉強しました。」

ここでは「する」が学習の眼目。㉑では「する」が「ゆうべ」という「時」を表わす連用修飾成分を伴って「した」になった。㉑の「前田さん」は、呼びかけ。以後、問う分にも答える文にも主部の省かれた言い方が続くことに注意。答える文は、もちろん「私は……」である。また「ゆうべ」の行動が話題になっているため、「しましたか」→「しました」で質問応答が続く。

㉒以下、「勉強をする」という「する」の本動詞としての用法と「勉強する」という複合動詞としての用法を学習する。応用例として、

予習をする	}	→	{	予習する
復習をする				復習する
練習をする				練習する

等をあげることができる。ただ、「宿題をする」は「宿題する」と言えないようである。

「する」についてここでは「何」の学習が大事である。

㉑㉒で、「何を」→「勉強を」

㉑㉒で、「何の」→「数学の」

㉑㉒で、「何時から」→「九時から」

「何時まで」→「十一時まで」

が取り上げられている。㉑㉒、㉑㉒の発展的学習としては、

④⑤の、「何で」→「パスで」

があげられる。

また、②⑥と同様の学習項目に、たとえば、

③④で、「何時に」→「七時に」

がある。

「から」「まで」は、⑩⑪'で動作の出発点、動作の及ぶ範囲・限界を示すものとしてその用法に触れたが、②⑥のように「時」についても同様の意味合いで用いられる。また、③④での「に」は、ある「時刻」を指定する言い方である。

### Ⅲ-2 昨夜、就寝するまでの行動を話題にして(続)

教師「②⑦テレビを見ましたか。」

前田「②⑧いいえ、見ませんでした。」

「\_\_\_を見る」「\_\_\_を見ない」の意味・用法及びその両方の過去形の言い方がここでの学習項目である。発展的学習として「\_\_\_を聞く」「\_\_\_を読む」「\_\_\_を書く」等に広げていくことができよう。

映像の点では「勉強をした」「テレビを見なかった」がコントラストとして描かれている。

なお、②の応答では「テレビを」が省かれていることに注意。後の④も同様である。

### Ⅲ-3 就寝、起床を話題にして

教師「②⑨何時に寝ましたか。」

前田「②⑩十一時に寝ました。」

教師「③⑪けさは何時に起きましたか。」

前田「③⑫七時に起きました。」

ここは①～⑥を復習し、発展させたものである。「寝る」「起きる」の過去形の用法が学習主題であり、ここで過去形の用法がしっかりつかめよう。

「時刻」を指定する「に」の用法についてはすでに触れた。③の「けさ」という「時」を表わす連用修飾成分の意味・用法に注意。②「ゆうべ」とともに格助詞なしで使われている。

### Ⅲ-4 起きてから食事するまでの行動を話題にして

教師「③それから何をしましたか。」

前田「④顔を洗いました。」

⑤食堂で朝ごはんを食べました。」

教師「⑥何を食べましたか。」

前田「⑦パンを食べました。」

教師「⑧コーヒーを飲みましたか。」

前田「⑨いいえ、ミルクを飲みました。」

ここでの動詞は、「する」「洗う」「食べる」「飲む」。「洗う」は場面Ⅰで映像化されながらナレーションとして取り上げられなかった動詞だが、映像からその意味をつかみやすい動詞である。以上の動詞は全て「\_\_を」を取る。

③の「それから」は、そのあとどうしたか、ここでは④の行動の後、何をしたのかと次の話題へ進めていくための接続詞である。

⑤「食堂で」の「で」は、④で触れた、動作・作用の起こる、あるいは行われる場所を示す「で」である。不定質問文では「どこ」が用いられる。たとえば、

⑤' どこで朝ごはんを食べましたか。

⑤'' 食堂で食べました。

となる。

この場面Ⅲでは同様の実例が、④⑧にある。

④どこで→⑧学校の近くで

⑨は⑧と同じように「いいえ」で始まるが、「いいえ」に続いて、直接自分がした動作を述べたもの。くどく言えば、

③' いいえ、コーヒーを飲みませんでした。ミルクを飲みました。  
となる。

### Ⅲ-5 食事後、寮を出ていくまでの行動を話題にして

教師「④新聞は読みましたか。」

前田「④いいえ、飲みませんでした。」

④時間がありませんでした。」

「読む」は「\_\_\_を読む」であるが、特に対象語を主題化したい時には、「\_\_\_を」が「\_\_\_は」となる。ここでは「\_\_\_を」の形がずっと続いてきたため、話題転換的な意味合いもあって「\_\_\_は」となったといえよう。「\_\_\_を」等の主題化による「\_\_\_は」への変換は、初級のどの段階で更に深い学習をするか、難しいところである。

④は④の原因・理由の説明。したがって、④の冒頭に意味的には「なぜなら」を補える。「時間がある／ない」は、単に時間の有無についての事実を述べたもの。この「が」にも注意が必要である。「時間はありませんでした」と言えば、「時間」に対する強調度が非常に強くなる。

ここでは文法的に難しい問題が並ぶが、その取り上げ方の強弱は、実際の教室の学習内容や学習進度で決められてこよう。

### Ⅲ-5 寮を出る時とバスによる通学を話題にして

教師「④何時に寮を出ましたか。」

前田「④八時に出ました。」

教師「④何で学校へ来ましたか。」

前田「④バスで来ました。」

教師「④どこでバスを降りましたか。」

前田「④学校の近くで降りました。」

動詞「出る」「来る」「降りる」はすでに取り上げたものばかりである。その過去形の用法が理解できればよい。ただ「来る」の用法には注意を。

⑬ 前田さんはバスで学校へ行きます。

⑭' 前田さんはバスで学校へ来ます。

「行く」「来る」は、話し手の立場に参与してくる。⑭' は前田さんのたどりつく場所、学校を話し手の立場にしての言い方である。

⑮⑯の「\_\_\_で」はすでに説明したように手段・方法を、⑰⑱の「\_\_\_で」は動作・作用の行なわれる場所を表わす連用修飾成分である。続けて出てくるので注意してほしい。

⑲の「近く」は名詞である。(ついでに「遠く」を学習してもよい。)

〔5〕 家の近くにいます。

〔6〕 家の近くで遊びます。

### Ⅲ-6 学校到着を話題にして

教師「⑳何時に学校に着きましたか。」

前田「㉑九時十分前に着きました。」

教師「㉒寮から学校まで何分かかりましたか。」

前田「㉓五十分かかりました。」

動詞は「着く」と「かかる」。「着く」は、「入る」「乗る」とともにたどりつく所、帰着点を表わす「に」を伴って「\_\_\_に着く」となる。「かかる」は、所要時間を言う動詞で、助詞を伴わず、使われることに注意。

六十分以上の場合には、

㉔' 一時間かかりました。

㉔'' 一時間十五分かかりました。

㉔''' 一時間半かかりました。

等となり、「時間」を使う。

また「何分」の用法に注意。「時刻」は「何時何分」,「時間」は「何時間何分」で、「分」は両方に共通。

以上で場面Ⅲの説明を終える。場面Ⅰ, Ⅱに表われなかった動詞は、「す



る」「見る」「読む」「(時間が)ある」「着く」「かかる」である。また「時間」関係の言い方として格助詞「に」「から」「まで」の用法を学習した。

### 2.3. 語句、語法、文型

2.2. では映画の構成に即して映像の果たし得る役割と結びつけながら、動詞の問題を見てきた。また連用修飾成分の用法や「時」の言い方に触れた。ここでは、今までに説明し残したことを補いながら、大事な問題点を整理してみる。

#### 2.3.1. 動詞

まず、この課で取り上げた動詞が表わす意味・概念の点から整理してみると次の通りである。

##### A. 対表現になっているもの

{ 寝る	{ 入る	{ 乗る	{ 行く
{ 起きる	{ 出る	{ 降りる	{ 来る

##### B. 類似した行為の表現になっているもの

{ 食べる
{ 飲む

##### C. 精神的活動を表現するもの

{ 見る
{ 読む

##### D. その他

- 行為そのものを表わす……する (勉強する)
- 足による移動動作を表わす……歩く
- 到着を表わす……着く
- 所要時間を表わす……かかる
- よごれを落とす動作を表わす……洗う
- 有無あるいは、所有を表わす……ある

上の分類は学習上の便宜を図るもので、分類の基準は一様ではない。

A. については、二つの動詞の意味を対照させることで学習させやすい。  
B. は、動作の働きかけが及ぶ対象物を明確にすることで二つの動詞の類似点と相違点を学習できよう。C. にも同様のことが言える。ただ精神的活動であるだけに動作主の動作がどう働くかにより「新聞を読む」とも「新聞を見る」ともいえる。

D. は、A. B. C. のように何らかの特徴で対にまとめられなかったものである。そこでざっと動詞の意味を書きそえた。

次に動詞の用法だが、この課ではすでに述べた通り現在形と過去形の一般的な用法を学習項目にしている。

#### A. 現在形の用法

どのような動作・作用をどう言うのかという理解を前提にして、

1. 単なる動作・作用の叙述
2. (近) 未来の動作・作用の表現 (ただし、「ある」は別扱い)
3. 習慣的な動作・作用の表現

を取り上げている。頻度を表わす副詞を連用修飾成分に加える学習に発展すれば、

4. 繰り返し起こる動作・作用の表現

をここに加えることになろう。

#### B. 過去形の用法

1. 過去の動作・作用、あるいは完了した動作・作用の表現

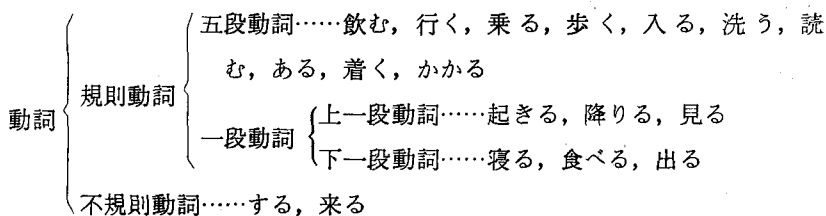
過去形の学習は、ひとまずそれで十分なわけだが、場合によっては特殊な用例として、

2. 完了直前の動作・作用の表現 (ただし、その動作・作用の認め手側からは、完了直前を完了と認める気持ちの働きがあるといえよう。)

をつけ加えることもできよう。これは「あっ、バスが来た。」を例にしているが、更に発展的な学習を考えるとするなら、「ああ、おなかがすいた。」とか「あっ、あった。」等も考察に加えなくてはならないだろう。しかし、通常、こうした問題は初級段階では扱わない。

現在形、過去形ともその肯否両形の学習に習熟する必要がある。

最後に動詞の活用の問題があるが、ここではこの課の動詞の分類整理だけをし、活用の詳細には触れない。動詞の活用をどうとらえ、どう整理分類し、それをどう名付けるか等は、まずそれぞれの教科書に従い、ついで各教師の考えに従っておいてよいだろう。



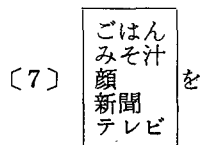
(ただし、「する」には「勉強する」等の複合動詞としての用法がある。

「ます」形の作り方については、あらためて説明しない。

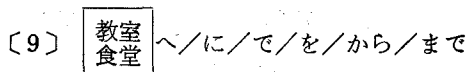
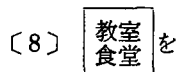
### 2.3.2. 名詞・代名詞

名詞は格助詞を伴うことで連用修飾成分となる。この課で取り上げた名詞は、どのような連用修飾成分になるものなのか、簡単な整理・分類をしてみる。

まず、動作・作用の働きかけが及ぶ対象語になるものには、飲食物(「ごはん」「パン」「みそ汁」「コーヒー」「ミルク」)、身体部位(「顔」)、それに「新聞」や「テレビ」等がある。



「学校」「教室」「寮」「食堂」等の建物、あるいはその一部を表わすものも対象語になるが、当然のことながら場所を示す連用修飾成分にもなる。



乗り物（「バス」）も対象語になるが、手段、方法を示す連用修飾成分にもなる。

〔10〕 

バス
----

 を                      〔11〕 

バス
----

 で

「時」表現に関係する「毎朝」「けさ」「ゆうべ」は、格助詞を伴わずそのまま連用修飾成分になることに注意。

〔12〕 

けさ ゆうべ
-----------

 テレビを見ました。

〔13〕 

毎朝
----

 新聞を読みます。

以上の他に個有名詞として「前田」「加藤」という人名がある。この課では「前田さんは……」「加藤さんは……」という言い方で動作主を明示するため用いられた。動作主を示すのに「\_\_は」「\_\_が」の問題があるが、この課ではそれを積極的には取り上げなかった。「は」「が」の問題については基礎篇第二課の解説を参照してほしい。

他に「前田さん」という呼びかけの用法が㉔にあるが、これもここでは大きな学習項目になっていない。この点についても基礎篇第二課の解説を参照してほしい。

この課に出てくる代名詞は「ここ」「どこ」「何」の三つだけである。「ここ」は場所を示し、「どこ」は場所を問う代名詞であるから、次のような連用修飾成分になる。

〔14〕 

ここ どこ
----------

 へ／に／で／を／から／まで

「何」はこの課では三つの用例がある。「何を」（動作作用の働きかける対象物を問う場合）、「何で」（どのような手段・方法によったかを問う場合）、「何の」の三つである。「の」の用法については後に述べる。

「何」は他に、接辞となって「時」を問う用法がここでは大事な学習項目になっている。これも後で触れる。

### 2.3.3. 格助詞, 等

この課で学習する格助詞を整理分類すると次の通りである。ここではこの課での動詞との結びつきを重視しながら述べていく。

#### A. 動作・作用の働きかけが及ぶ対象を示すもの……「を」

〔15〕 \_\_\_ を

食べる／飲む 見る／読む 洗う する
-----------------------------

対象物を問う場合には「何を」になる。

#### B. 時間表現に関係するもの……「に」「から」「まで」

- 「に」……動作・作用の行われる時間的一点を表わす。
- 「から」……これから続く動作・作用の時間的開始を表わす。
- 「まで」……続いてきた動作・作用の時間的終結を表わす。

〔16〕 \_\_\_ に

{	寝る／起きる
	行く／来る
	着く

〔17〕 \_\_\_ から

{	勉強する
	___を見る／読む

〔18〕 \_\_\_ まで

{	勉強する
	___を見る／読む

\_\_\_の部分には当然のことながら「時刻」を表わすことばが入る。たとえば、「九時に」「十時から」「十一時まで」等である。それを問う時には「何時に／から／まで」という言い方になる。

#### C. 場所表現に関係するもの……「へ」「に」「を」「で」「から」「まで」

- 「へ」……動作・作用がそちらの方向へ向けて行われることを表わす。
- 「に」……動作・作用の入りどころ, 到着点を表わす。
- 「を」……動作・作用の出どころ, 出発点を表わす。
- 「から」……これから開始する動作・作用の出発点を表わす。

。「まで」……今まで続いてきた動作・作用が終結する範囲・限界を表わす。

- 〔19〕 \_\_\_へ行く／来る  
 〔20〕 \_\_\_に入る／乗る／着く  
 〔21〕 \_\_\_を出る／降りる  
 〔22〕 \_\_\_から { 行く／来る  
                   歩く  
 〔23〕 \_\_\_まで { 行く／来る  
                   歩く

- 〔24〕 \_\_\_で { \_\_\_\_\_を { 食べる／飲む  
                                   見る／読む  
                                   洗う  
                                   する  
                   \_\_\_\_\_に乗る  
                   \_\_\_\_\_を降りる  
                   勉強する

以上の場所関係を問う時には、「どこ」が用いられる。

D. 手段・方法の表現に関係するもの……「で」

- 〔25〕 \_\_\_で { \_\_\_\_\_を { 食べる／飲む  
                                   見る／読む  
                                   洗う  
                                   する  
                   \_\_\_\_\_へ行く／来る  
                   勉強する

これを問う時には「なんで」になる。

以上の例は、十分なものではない。特に「で」は、場所を表わすものにしても手段・方法を表わすものにしても他の格助詞を伴う連用修飾成分と同じ文中に用いられることが多いので、その表われ方を表にしていくと際限が

ない。

「時」を表わす連用修飾成分も当然、他の連用修飾成分といっしょに同じ文中に用いられる。

すでに述べたことだが「\_\_\_にある／いる」の「に」は第二課、第四課で学習した。場所表示に関係のある格助詞（「を」、その他）は第九課で更に集中的に学習する。また「が」は、第八課、第九課で扱っている。

この課では取り上げなかったが、同じ時期に学習項目として扱ってもよいものに次の項目がある。

E. 仲間や相手の表現に関係するもの……「と」「に」

[26] \_\_\_と  $\left\{ \begin{array}{l} \text{___を} \left\{ \begin{array}{l} \text{食べる／飲む} \\ \text{見る／読む} \end{array} \right. \\ \text{___へ行く／来る} \\ \text{勉強する} \end{array} \right.$

[27] \_\_\_に会う

なお、この他に格助詞としては「の」の問題がある。この課では次の二つの用例が出ている。

㊹ 数学の勉強（対象の指定）

㊺ 学校の近く（場所の指定）

動詞の学習は、連用修飾成分の学習と密接な関係にある。つまり動詞の導入段階では、動詞と格助詞との結びつき方で動詞を幾つかのグループに分け、格助詞の学習との関係で動詞の学習をしないでいくという方法が一般的であろう。その意味では、この課での動詞の学習はふつうの初級教科書の三、四課分を取り込んでいるといえようか。このことは、この映画教材を学習段階のどの時期に利用するかということと関わるが、また、どう利用するかとも関わっているはずである。

#### 2.3.4. 副詞、接続詞

「まだ」は「もう」と対で学習するのがよい。

②'' 前田さんはもう寝ます。

③ 加藤さんはまだ寝ません。

「毎朝」との関連で「時々」「よく」「いつも」等の頻度を表わす言い方をここで取り上げてもよい。

⑦''' 前田さんは 

時々
よく
いつも

 パンを食べます。

「早く」「遅く」等に触れるとすれば、形容詞の副詞的用法にまで学習が広がっていく。

「それから」の学習にあたっては、「そして」「しかし」「でも」等の関連語の用法に触れることができる。

### 2.3.5. 「時」の言い方

「時」の言い方は、「時刻」の言い方と「(所要) 時間」の言い方がある。すでに触れた通り前者は、「\_\_\_です」の文型で表わされ、助数詞として「時」「分」が用いられる。どちらもイチ、ニ、サン……の系列の数を表わすが、「時」と「分」では数詞部分の発音が微妙に違っているので要注意。また、「分」は「ふん」「ぶん」と発音が二様になる。「一分」「六分」「八分」「十分」等は、同時に促音の発音練習にもなる。

ここで「半」とか「過ぎ」「前」等を学習しておくのも、初級日本語教育コースの常識である。ついでに「(この時計は) 合っている」「止まっている」「進んでいる」「遅れている」等という表現練習に広げていくこともできよう。なお、「秒」については第七課で学習することになっているが、ここで同時に取り上げておいてもよい。

「時刻」をきく時には、「何」を用いて「何時(なんじ)ですか」「何分(なんぶん)ですか」となる。「時刻」が連用修飾成分になって動詞述語文に現われる場合には、「何時に」「何時から」「何時まで」等となることはすでに触れた。

次に「(所要) 時間」を表わすには、助数詞として「時間」「分」を用い、数え方の系列は「時刻」の場合と同じである。「時」と「時間」は全く同じ



数え方でよいが、七と九の場合「七時」「九時」は「しちじ」「くじ」と読み方が一定しているのに対し、「七時間」「九時間」の方は「ななじかん」「しちじかん」、「くじかん」「きゅうじかん」の両方がある。

「分」は助数詞部分も含め、「時刻」の数え方と同じである。（「秒」についても全く同様である。）

「時間」の言い方は、「\_\_\_\_かかる」という形で表現される。「かかる」は動詞であるから、これは当然動詞述語文の一つである。この場合、「を」「に」等の格助詞を伴わないことに要注意。

「時間」をきく時には、「何時間（なんじかん）かかりますか」「何分（なんぶん）かかりますか」となる。

### 3. この映画の効果的な利用のために

映画（16ミリ、8ミリ）、ビデオをメディアとしているこの教材をどう効果的に、有効に使いこなしていくか、というのがここでの中心的な問題である。全般的な概説は、映画解説1「これはかえるです」に述べておいたので、そちらを参照してほしい。

ただ、この解説書の資料1.使用語彙一覧（かな書き）や資料2.シナリオ全文（かな書き）もコピーをとることで補助教材として役立ててほしい、ということをごここに付け加えておく。3.3.の練習問題も必要に応じた修正を加えることで補助教材として十分役立つものと思う。

#### 3.1. 動詞の導入にあたって

「日本語の文法」（倉持保雄 1971 「外国人のための基本語用例辞典」付録 文化庁）によれば、日本語による表現を「いちばんかんたんな形にしてみると、つぎの四種類の型」になる。この「四種類の型」は、それぞれ、

a 何が 何だ。

b 何が ある（いる）。

c 何が どうする。

d 何が どんなんだ。

である。aが名詞述語文、b、cが動詞述語文、dが形容詞述語文であり、この日本語教育映画基礎篇ではa、b、dの学習が済んでからcの動詞述語文へ進む、という学習順をとった。(ただし、dの「どんなんだ」の部分については、形容詞だけが第三課で取り上げられ、形容動詞の学習は次の第六課に残されている。)

この学習順には別に絶対的な理由があるわけではないが、動詞述語文の導入にあたっては他の「型」の学習に比べるとずっと複雑な問題がからむので、上記の四つの「型」の中では最後に取り上げ、しだいに学習の範囲を広げていくというのが初級教科書一般のようである。

ここでcの動詞述語文を導入するにあたって生じてくる問題を幾つか、この基礎篇のシリーズに即して簡単にふれてみよう。

#### (1) 「です」「ます」の問題

初級日本語教育は、ふつう、デス・マス体を基本としている。上記のa、bの学習にあたっては文末を「です」に、b、cの学習にあたっては「ます」に統一しておけば、文型的な整理ができ、初歩学習をスムーズに進めていけよう。ただ、動詞には活用の種類があるので「ます」形作りの点で「です」形より学習が複雑になる。

デス・マス体については、それを基本的な形にすることではあまり異論はなさそうだが、同時に informal な形も早くから学習させるべきだ、という意見がある。この点に関しては、その学習者の日本語修得最終目標とも関連するし、また動詞述語文の学習段階での混乱をなるべく防ぐ工夫も必要である。つまり、社会言語学的な観点からの場面や人物関係の情報をカリキュラムに即して体系的に順次取り入れていく工夫が必要である。

#### (2) 「ある、いる」と動詞一般の問題

上記のb、cは述部が動詞という意味では区別する必要はないが、その用法に相違があるのでふつう別に扱われている。

〔28〕 さいふはここにあります。

という表現は、「ある」という現在形を用いて現在の状態を述べている。ところが、動詞一般の用法はすでにみた通り（近）未来や習慣的な動作・作用を述べる等、用法が異なり、また複雑でもある。この基礎篇でも「ある、いる」の学習を終えてから動詞一般の学習へと進む形をとった。

### (3) 動詞一般と格助詞の問題

a, dの学習にあたっては、助詞はそれほど大きな問題にならない。bの学習の際に「は」と「が」の問題が登場するが、それを別にして格助詞一般についていえば、事物、人物のあり場所、い場所を表わす「に」の学習だけで一応済む。

ところが動詞を導入することは、格助詞全般にまで学習が広がっていくことを意味する。また格助詞の学習によってさまざまな動詞を学習していくことにもなる。こうした点からも動詞の学習は上記の「型」の中で最後にまわされることになるわけだが、しかし動詞（それに格助詞を加えて）を学習しなければ限られた表現しかできないことも事実である。動詞の導入によって表現は飛躍的に豊かになる。

格助詞の学習については、「を」（出発点、経過場所等）等の用法の理解に重点を置いた第九課「かまくらをあるきます」が別にある。また「が」（対象語等）の学習は、第八課「どちらがすきですか」で取り上げ、「\_\_\_\_が見える／聞こえる」は、第九課で取り上げている。

### (4) 動詞の発展的学習の問題

動詞述語文の学習は、この後ずっと続くものである。動詞導入の段階からその発展的学習が考慮されていなくてはならない。どのような問題があるか、簡単に列記してみると、

- アスペクトに関する問題
- 形式名詞との組み合わせによるさまざまな表現の問題
- 受け身、使役に関する問題
- やり・もらいに関する問題

- 条件の表現に関する問題
- 待遇表現にかかわる問題

等がある。

全体が三十課で構成されるこの日本語教育映画基礎篇では、「\_\_\_\_ている」「\_\_\_\_である」「\_\_\_\_ておく」「\_\_\_\_てみる」「\_\_\_\_てしまう」等の言い方や、依頼、経験、可能等の言い方を十一課から二十課までの学習項目とし、やり・もらい、受け身、使役、条件等の言い方や待遇表現の問題は二十課から三十課までに取り扱うことにした。

#### (5) 映像を通しての動詞学習上の問題

非常に初歩的な形で映像による表現とことばの学習の結びつきを考えると、たとえばこの映画でナレーションとして現われなかった言語表現にすでに補足的例としてあげた〔1〕～〔4〕がある。

- 〔1〕 加藤さんは勉強しています。
- 〔2〕 加藤さんは寝ています。
- 〔3〕 前田さんは歩いています。
- 〔4〕 前田さんはバスを待っています。

これらは表現としては動作の継続・持続を表わす「\_\_\_\_ている」の形になっている。〔1〕～〔4〕は、画面に生起する現象を見つめての表現であった。ということは、全ての動作・作用等はそのまま眺めれば、常に“動き”を伴った現象であり、時間の流れにそった進行の形になっている。

映画やビデオをメディアとする映像表現では、この進行の形が鮮明に出てくる。この映像表現が積極的に有効に利用されなくてはならないことは当然だろう。ただ、この実際の“動き”を追って、全てをナレーション化することは不可能であるし、また無意味でもある。人は連続する無数の“動き”の中から特定の“動き”を取り出し、ある立場からそれを表現する。

このことは視点の設定を意味する。視点を設定してそこからものを眺めることを意味する。これは言語教育の根幹をなすもので、動詞の学習にあたっては特にその意味が大きい。

また、映像それ自体は否定の表現はできない。しかし画面に提示される“動き”に対立する別の“動き”を想定すれば、そこに否定の表現が生まれてくる。

更に、過去の動作・作用も鮮明な進行の形で進む映像が表現できることではない。そこにそれが以前に起きた動作であり、作用であると認知し、了解する視点が必要である。その上で過去の動作・作用の表現が生まれてくる。

こうして視点の設定のしかたによっては、映像表現は豊かに生かしていくことができるであろう。この動詞導入の映画の場合でも全くナレーションにとらわれず必要な学習項目を映像から引き出してくるということが考えられてもいいだろう。〔1〕～〔4〕の例で見た通り「\_\_\_\_ている」の学習もここで可能なのである。

すでに繰り返し述べたように実際の動作・作用等を具体的に提示しながら、学習を進めることができる点で映像教材は、他の活字教材等にはない強みを持っているわけだが、以上述べたような視点の導入により学習は更に強化されることになるだろう。

### 3.2. 語彙の拡充

この映画で取り上げた主要な語を中心にして語彙の発展的学習を考えてみたい。補助教材の作成や練習問題の作成の際に利用できるものと思う。

まず、動作・作用等の表現をめぐる。

A. 「寝る」「起きる」をもとにして

- 休む ◦ 目がさめる ◦ 立つ ◦ すわる ◦ 立ち止まる ◦ 住む
- 働く ◦ 遊ぶ ◦ 疲れる ◦ 生まれる ◦ 死ぬ

B. 「乗る」「降りる」をもとにして

- 上がる ◦ 下がる ◦ のぼる ◦ 落ちる

C. 「行く」「来る」をもとにして

- 帰る ◦ 戻る

D. 「見る」をもとにして

- 聞く ◦ 思う ◦ 考える ◦ わかる ◦ 知る ◦ 喜ぶ ◦ 驚く
- おこる ◦ 笑う ◦ 泣く

E. 「読む」をもとにして

- 書く ◦ 話す ◦ 言う ◦ たずねる ◦ 答える ◦ 作る ◦ 使う
- 教える

F. 「歩く」をもとにして

- 進む ◦ 通る ◦ 渡る ◦ 走る ◦ 飛ぶ ◦ 泳ぐ

G. 「洗う」をもとにして

- お風呂に入る ◦ 脱ぐ ◦ 着る

H. 「する」をもとにして

- 勉強する ◦ 散歩する ◦ 食事する ◦ 病気になる

次に、事物等の表現をめぐって。

A. 「寮」をもとにして

- 食堂 ◦ 部屋 ◦ 玄関 ◦ 受付 ◦ 談話室 ◦ 便所（お手洗い、トイレ）
- 廊下 ◦ 管理人室

B. 「学校」をもとにして

- 教室 ◦ 運動場 ◦ 先生 ◦ 学生（生徒） ◦ 授業 ◦ 幼稚園 ◦ 小学校
- 中学校 ◦ 高校 ◦ 大学 ◦ 国立 ◦ 私立 ◦ 女子大

C. 「バス」をもとにして

- 電車 ◦ 地下鉄 ◦ 汽車 ◦ 自動車 ◦ 自転車 ◦ 飛行機 ◦ エレベーター
- エスカレーター ◦ 鉄道 ◦ 国鉄 ◦ 私鉄 ◦ 急行 ◦ 新幹線

D. 「数学」をもとにして

- 日本語 ◦ 国語 ◦ 英語 ◦ フランス語 ◦ ドイツ語 ◦ ロシア語
- 中国語 ◦ 社会 ◦ 歴史 ◦ 日本史 ◦ 地理 ◦ 理科 ◦ 科学 ◦ 化学
- 物理 ◦ 音楽 ◦ 図画 ◦ 体育 ◦ 算数

E. 「ご飯」「パン」をもとにして

。(お) そば 。うどん 。ラーメン 。ライスカレー 。チャーハン  
。天井 。おすし 。てんぷら 。おにぎり 。サンドウィッチ 。玉  
子焼 。オムレット 。ピフテキ 。サラダ 。和食 。洋食 。中華料  
理

F. 「みそしる」「ミルク」「コーヒー」をもとにして

。スープ 。ジュース 。お茶 。紅茶 。(お) 酒 。ビール 。ウ  
ィスキー 。たばこ

G. 「新聞」をもとにして

。教科書 。テキスト 。本 。雑誌 。参考書 。論文

H. 「テレビ」をもとにして

。映画 。劇 。能 。歌舞伎 。ラジオ

I. 「顔」をもとにして

。頭 。目 。鼻 。耳 。口 。首 。手 。足 。おなか 。背中  
。からだ

J. 「近く」をもとにして

。遠く 。そば 。あたり

K. 「けさ」「ゆうべ」をもとにして

。今夜 。昨夜 。きよう 。きのう 。おととい 。あした 。あさ  
って 。今 。さっき 。先日 。このあいだ 。これから 。今週  
。先週 。来週 。今月 。先月 。来月 。今年 。去年 。来年

L. 「毎朝」をもとにして

。毎日 。毎晩 。毎夜 。毎週 。毎月 。毎年

### 3.3. 練習問題

まず、動詞の学習から始めよう。この学習の場合、ピクチャー・カードを  
提示してもよいし、ビデオを見せることができるならば更により。

A-1 例にならって、以下の動詞の変化を言いなさい。

(例) いきます→ いきません いきました いきませんでした

a. よみます b. みます c. はいります d. めます e. のります  
 f. おります g. のみます h. たべます i. ねます  
 j. おきます k. きます l. あるきます m. つきます n. かかります  
 o. あらいます p. します

A-2 例にならって、以下の動詞の変化を言いなさい。

(例) いく→いきます いきません いきました いきませんでした

a. よむ b. はいる c. のる d. のむ e. あるく f. つく  
 g. かかる h. あらう

i. みる j. おりる k. おきる l. ねる m. でる n. たべる

o. くる p. する

続いて、「時」の言い方を練習しておこう。

B-1 順に言いなさい。

(いま)  
(ちょうど)

いち に さん よ ご ろ く し ち は ち く じ ゅう じ ゅう いち じ ゅう に	じ
--	---

です。

B-2 順に言いなさい。

(いま)ごじ  
(ちょうど)ごじ

ごふん じっぶん(すぎ) じゅうごふん(すぎ) さんじっぶん はん じっぶんまえ ごふんまえ
--

です。

B-3 順に言いなさい。



(ちょうど)

いち ご しち く	じかん
--------------------	-----

かかります。

B-4 順に言いなさい。

りょうからがっこうまで

じっ に さん よん ご	じっ じっ じっ じっ じっ	ぶん
--------------------------	----------------------------	----

かかりました。

次に、格助詞等の学習も兼ねながら、動詞述語文の学習しよう。

C-1 順に言いなさい。

(わたしは)

ね おき いき き	ます。
--------------------	-----

C-2 順に言いなさい。

(わたしは)

ごはん
パン
コーヒー
ミルク
テレビ
えいが
しんぶん
ざっし
かお
て
べんぎょう
さんぽ

を

たべ
のみ
み
よみ
あらい
し
ました。

C-3 順に言いなさい。

(わたしは)

しちじ
じゅういちじ
くじはん
ごぜんはちじ
ごごさんじ

に

おき
ね
いき
き
つき
ました。

C-4 順に言いなさい。

(わたしは) 

いちじ
にし
さんじはん

 から 

にし
さんじはん
よじじっぷんまえ

 まで 

べんきょう
しんぶん
テレビ

 を 

し
よみ
み

まし
また。

C-4 順に言いなさい。

(わたしは) 

がっこう
へ
いき
き

きょうしつ
でんしゃ
だいがく

 に 

はいり
のり
つき

りょう
ちかてつ

 を 

で
おり

えき
----

 から 

あるき
いき
き

りょう
-----

 まで 

あるき
いき
き

 ます。

C-5 順にいいなさい。

(わたしは) 

しょくどう
へや
_____えき
_____えき

 で 

しょくじ
テレビ
でんしゃ

 を 

し
み
のり
おり

 ます。

C-6 順に言いなさい。

(わたしは) 

うちのちかく
うちのそば
こうえんのあたり
とおく

 で 

さんぼします。
あそびます。

C-7 順に言いなさい。

(わたしは)	フォーク	で	にく	を	たべ	ます。
	みず		て		あらい	
	さんこうしょ		べんきょう		し	
	バス		だいがく		へいき	

C-8 順に言いなさい。

(わたしは) 

きょう まいにち いつも はちじに
----------------------------

 がっこうへいきます。

D. 例文の下線部に以下の語を代入して言いなさい。

(例) まえださんは、もうねました。

かとうさんは、まだねません。

a. おき b. いき c. き d. つき e. し f. たべ

E. 例文の下線部に以下の語を代入して言いなさい。

(例) しちじにおきました。

それから、あさごはんをたべました。

a. (がっこうへいき, べんきょうをし) b. (きょうかしょをよみ, かんじのべんきょうをし) c. (テレビをみ, しんぶんをよみ) d. (ゆうごはんをたべ, おふろにはいり) e. (でんしゃをおり, がっこうまであるき) f. (いえのちかくでさんぽをし, デパートでかいものをし)

F. 例文の下線部に以下の語を代入して言いなさい。

(例) バスはまだきません。

バスがきました。

バスにのります。

バスをおります。

a. ちかてつ b. でんしゃ c. きしゃ d. きゅうこう e. しんかんせん

G. 例文の下線部に以下の語を代入して言いなさい。

(例) (わたしは) バスでがっこうへいきます。

ここでバスにのります。

- a. (でんしゃ, このえき)   b. (ちかてつ, おうじえき)   c. (じてんしゃ, りょうのまえ)   d. (ともだちのじどうしゃ, りょうのちかく)  
e. (こくでん, いたばしえき)

続いて二文結合や質問応答等の練習をしよう。

G. 例にならって二文を一文にしなさい。

(例) しちじです。まえださんは、おきます。

→ まえださんはしちじにおきます。

- b. じゅういちじです。まえださんは、ねます。→  
a. しちじはんです。まえださんは、しょくどうへいきます。→  
b. はちじです。まえださんは、りょうをでます。  
c. くじじっぷんまえです。まえださんは、がっこうにつきます。→  
d. くじです。まえださんは、べんきょうをはじめます。→  
e. よじです。まえださんは、べんきょうをおわります。  
f. よじじっぷんです。まえださんは、りょうへかえります。→  
g. しちじです。まえださんは、テレビをみます。

H. 以下の質問に答えなさい。

H-1

- a. まいにち、なんじにおきますか。→  
b. なんじにがっこうへいきますか。  
c. なんでがっこうへいきますか。(バスですか、でんしゃですか。)→  
d. がっこうまでなんぶんかかりますか。→  
e. がっこうでなんのべんきょうをしますか。→  
f. それから、なんのべんきょうをしますか。  
g. なんじからなんじまでべんきょうをしますか。→  
h. どこでおひるごはんをたべますか。→

i. うちへなんじにかえますか。→

j. よる、なにをしますか。→

k. なんじにねますか。→

## H-2

a. きのう、なんじにおきましたか。→

b. なんじにがっこうへいきましたか。→

c. なんてがっこうへいきましたか。(バスですか、でんしゃですか。)→

d. がっこうまでなんぶんかかりましたか。→

e. がっこうでなんのべんぎょうをしましたか。→

f. それから、なんのべんぎょうをしましたか。→

g. なんじからなんじまでべんぎょうをしましたか。→

h. どこでおひるごはんをたべましたか。→

i. うちへなんじにかえりましたか。→

j. よる、なにをしましたか。→

k. なんじにねましたか。→

## I. 例にならって、以下の質問応答の練習をなさい。

(例) Q: \_\_\_\_さん、きょう、なにをしますか。

A: べんぎょうをします。

Q: なんのべんぎょうをしますか。

A: にほんごのべんぎょうをします。

a. Q: \_\_\_\_さん、こんや、なにをしますか。

A: ほんを\_\_\_\_\_。

Q: なんの\_\_\_\_\_。

A: にほんごの\_\_\_\_\_。

b. Q: \_\_\_\_さん、こんや、なにをしますか。

A: ろんぶんを\_\_\_\_\_。

Q: なんの\_\_\_\_\_。

A: にほんごの\_\_\_\_\_。

c. Q: \_\_\_\_さん, ゆうべ, なにをしましたか。

A: べんぎょうを\_\_\_\_\_。

Q: なんの\_\_\_\_\_。

A: にほんごの\_\_\_\_\_。

d. Q: \_\_\_\_さん, きょう, なにをしましたか。

A: えいがを\_\_\_\_\_。

Q: なんの\_\_\_\_\_。

A: 「らしょうもん」です。

J. 例にならって, ( ) 内の語を使い以下の質問に答えなさい。

(例) ごはんをたべましたか。(パン) →いいえ, パンをたべました。

a. えいがをみましたか。(テレビ) →

b. ミルクをのみましたか。(ジュース) →

c. ほんをよみましたか。(しんぶん) →

d. べんぎょうをしましたか。(さんぽ) →

e. えいがをみましたか。(テレビ) →

f. ほんをかいましたか。(ノート) →

K. 例にならって, 以下の質問に答えなさい。

(例) しんぶんをよみましたか。→いいえ, しんぶんは, よみませんでした。

a. ごはんをたべましたか。→

b. コーヒーをのみましたか。→

c. テレビをみましたか。→

d. さんこうしょをよみましたか。→

e. べんぎょうをしましたか。→

f. しんぶんをかいましたか。→

L. 例にならって ( ) 内の語を使い以下の質問に答えなさい。

(例) しんぶんはよみましたか。(じかん) → いいえ、よみませんでした。  
た。じかんがありませんでした。

- a. さんこうしょはよみましたか。(じかん) →
- b. さんぽはしましたか。(じかん) →
- c. テレビはみましたか。(ひま) →
- d. ほんはかいましたか。(おかね) →

### 3.4. 映画場面を使っての練習

すでに述べたとおり、この映画は前半のナレーション部分と後半の質問応答の部分に大きく二分できる。

前半ナレーション部分については、動詞の概念・意味の理解がすんだ後、質問応答の形でやりとりする練習がまずできる。

次にナレーションのない動作・作用をできるだけ拾い出し、それをことば化して言う練習もできる。この場合、終止形と言うか、「ます」形と言うかは、その教室での学習方法にあわせればよいし、「する」「している」に注目して動作・作用の継続進行の学習に発展させていってもよい。

以上をまた質問応答の形でやりとりする練習もできる。

後半の質問応答の部分については、まずそのままの形で質問応答の練習に利用できる。そして学習済みの動作・作用等の言い方を適宜加えていくこともできる。更に、これは日本語教育の実際の教室でよく行われていることだが、そのまま応用して昨夜からけさまでの学生の行動をそっくり言わせる練習ができる。

あるおもしろい話題が学生の行動にあった場合、それを拾い出して、それを詳しく述べる練習、またそれについて質問応答する練習なども考えられよう。

### 3.5. 進んだ段階での利用法

たとえば、次のような利用法が考えられる。

#### A. 「\_\_\_\_て」の言い方を学習しよう。

- (例) ◦ 前田さんは寝て、加藤さんは寝ません。  
◦ 前田さんはパンを食べて、ミルクを飲みます。  
加藤さんはみそしるを飲んで、ごはんを食べます。

#### B. 「\_\_\_\_している」の言い方を学習しよう。

- (例) ◦ 前田さんは寝ています。  
加藤さんは起きています。  
◦ 前田さんはパンを食べています。  
加藤さんはごはんを食べています。

#### C. 動詞の連体修飾の言い方を学習しよう。

- (例) ◦ 11時です。寝る時間です。  
◦ 7時です。起きる時間です。

#### D. 原因・理由の言い方を学習しよう。

- (例) ◦ しんぶんはよみましたか。  
じかんがないので、よみませんでした。

以上は、動詞の発展的学習に焦点を当てて述べたものである。

この映画では、文単位の学習、続いて質問応答の形の学習に重点を置いているため場面に即しての談話が現われていない。しかし、この映画での言語表現や場面をもとにしてあるまとまりのある談話を引き出し、発展的な学習を考えていってほしい。

映画教材も他の活字教材や音声教材と同じように使い込むことによってその利用方法や価値がはっきりしてくるものである。この基礎篇解説1に述べたことであるが、この映画教材をビデオとして利用可能なら、音声を消したり、全く別の音声表現と組み合わせたり、自由に操作することでその利用方法の幅もぐっと広くなるだろう。



#### 4. おもな参考文献

I. この解説書執筆に当たって直接参考にしたものは、次のとおりである。

鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』(教育文庫3) むぎ書房

寺村秀夫 1978 『日本語の文法(上)』(日本語教育指導参考書4) 国立  
国語研究所

II. 動詞論は、そのまま日本語文法論である。以下を代表的文献としてあげる。

鈴木一彦・林 巨樹編 1972 『動詞』(品詞別 日本文法講座 2) 明  
治書院

時枝誠記 1950 『日本文法 口語篇』 岩波書店

橋本進吉 1959 『国文法体系論』(橋本進吉博士著作集 7) 岩波書店

松下大三郎 1930 『改撰標準日本文法』 中文館書店

宮島達夫 1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告  
43) 秀英出版

山田孝雄 1922 『日本文法学概論』 宝文館

III. 助詞関係の文献として以下をあげる。

鈴木一彦・林 巨樹編 1972 『助詞』(品詞別 日本文法講座 9) 明  
治書院

永野賢 1951 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』(国立国語研  
究所報告 3) 秀英出版

# 資 料

## 資料1. 使用語彙一覧

これは映画中に使用された全ての語を一覧表にしたものである。資料2.のシナリオ全文のせりふ同様、教材として活用できることも考慮してかな（ひらがな、かたかな）書きにしてある。

1. 見出し語はアイウエオ順に配列し、そこにその使用文例を全て書き出した。
2. 見出し語の認定については、初級日本語教育の立場に立っている。
  - 2-1. 数詞は、「時」や「分」と組み合わせあった時の言い方を見出し語にし、それが数のみを言う場合と異なる時はその数の言い方を横に示した。
  - 2-2. 「分」は使用例との関係で「ぶん」が見出し語になっている。「ふん」はその横に示した。
  - 2-3. 動詞は「ます」を取り除いた形を見出し語にし、その横に終止形を示した。
  - 2-4. 「ます」「ません」「ました」「ませんでした」をそれぞれ見出し語にしている。
  - 2-5. なお、「勉強する」は「勉強」と「する」に切りはなし、二語扱いにした。
3. 見出し語の語義、活用変化、他の語との結びつき等に基づいて下位分類する場合には、(1)(2)……のようにした。
  - 3-1. 助詞「で」「に」「を」等はその用法により下位分類してある。
  - 3-2. 「なん」は代名詞であるか、接頭辞であるかにより下位分類してある。
  - 3-3. 「ました」は終助詞との結びつき方で下位分類してある。
4. 使用文例の文頭には、①②……の数字がつけてある。これはシナリオに現われた文の通し番号で、この解説書全体に共通のものである。同一見出し語内ではこの順に文例を提出した。(1)(2)……と下位分類した場合

も、その分類内で同一の提出順をとっている。全くの同一文の場合には、⑨⑩のように数字を横に並べ、引用を一回ですませた。ただし、同一文でも文中において語の用いられる位置が異なれば引用を繰返した。

5. 見出し語の横には〔 〕で当用漢字の範囲内で漢字を示し、また、その横には（ ）で語の使用回数を示した。
6. 文例の使用環境を知りたい場合には資料2.のシナリオ全文を参照のこと。

**あさごはん〔朝御飯〕(1)**

③⑤ しょくどうで**あさごはん**をたべました。

**あらい, あらう〔洗う〕(1)**

③④ かおを**あらい**ました。

**あり, ある(1)**

④② じかんが**あり**ませんでした。

**あるき, あるく〔歩く〕(1)**

①⑨ がっこうまで**ある**きます。

**いいえ(3)**

②⑧ **いいえ**, みませんでした。

③⑨ **いいえ**, ミルクをのみました。

④① **いいえ**, よみませんでした。

**いき, いく〔行く〕(1)**

①③ まえださんはバスでがっこうへ**い**きます。

**おき, おきる〔起きる〕(4)**

⑤ まえださんは**お**きます。

⑥ かとうさんはまだ**お**きません。

③① けさなんじに**お**きましたか。

③② しちじに**お**きました。

**おり, おりる〔降りる〕(3)**

①⑧ バスをお**り**ます。

④⑦ どこでバスをお**り**ましたか。

④⑧ がっこうのちかくでお**り**ました。

**か(15)**

②① まえださん, ゆうべなにを**し**ましたか。

②③ なんの**べん**ぎょうを**し**ましたか。

②⑤ なんじからなんじまで**べん**ぎょう**し**ましたか。

②⑦ テレビを**み**ましたか。

- ㉨ なんじにねましたか。
- ㉩ けさはなんじにおきましたか。
- ㊳ それからなにをしましたか。
- ㊴ なにをたべましたか。
- ㊵ コーヒーをのみましたか。
- ㊶ しんぶんはよみましたか。
- ㊷ なんじにりょうをでましたか。
- ㊸ なんてがっこうへきましたか。
- ㊹ どこでバスをおりましたか。
- ㊺ なんじにがっこうにつきましたか。
- ㊻ りょうからがっこうまでなんぶんかかりましたか。

が(2)

- ㊼ バスがきました。
- ㊽ じかんがありませんでした。

かお〔顔〕(1)

- ㊾ かおをあらいました。

かかり, かかる(2)

- ㊿ りょうからがっこうまでなんぶんかかりましたか。
- ㋀ ごじゅぶんかかりました。

がっこう〔学校〕(6)

- ㋁ まえださんはバスでがっこうへいきます。
- ㋂ がっこうまであるきます。
- ㋃ なんてがっこうへきましたか。
- ㋄ がっこうのちかくでおりました。
- ㋅ なんじにがっこうにつきましたか。
- ㋆ りょうからがっこうまでなんぶんかかりましたか。

かとう〔加藤〕(3)

- ㋇ かとうさんはまだねません。

⑥ かとうさんはまだおきません。

⑨ かとうさんはみそしるをのみます。

から (3)

(1)②⑤ なんじからなんじまでべんきょうしましたか。

②⑥ くじからじゅういちじまでべんきょうしました。

(2)⑥① りょうからがっこうまでなんぶんかかりますか。

き, くる [来る] (4)

⑮ バスはまだきません。

⑮⑥ バスがきました。

④⑤ なんてがっこうへきましたか。

④⑥ バスできました。

きょうしつ [教室] (1)

②④ きょうしつにはいます。

く, きゅう [九] (2)

②⑥ くじからじゅういちじまでべんきょうしました。

⑤⑦ くじっぶんまえにつきました。

けさ (1)

③① けさなんじにおきましたか。

ここ (1)

⑭④ まいあさここでバスにのります。

ごじっ, ごじゅう [五十] (1)

⑤② ごじっぶんかかりました。

ごはん [御飯] (1)

⑩⑩ ごはんをたべます。

コーヒー (1)

③⑧ コーヒーをのみましたか。

さん (9)

②② まえださんはねます。

- ③ かとうさんはまだねません。
- ⑤ まえださんはおきます。
- ⑥ かとうさんはまだおきません。
- ⑦ まえださんはパンをたべます。
- ⑨ かとうさんはみそしるをのみます。
- ⑪ まえださんはりょうをでます。
- ⑬ まえださんはバスでがっこうへいきます。
- ⑰ まえださん、ゆうべなにをしましたか。

し、する (7)

- ⑱ まえださん、ゆうべなにをしましたか。
- ⑳ ペンキょうをしました。
- ㉑ なんのペンキょうをしましたか。
- ㉒ すうがくのペンキょうをしました。
- ㉓ なんじからなんじまでペンキょうしましたか。
- ㉔ くじからじゅういちじまでペンキょうしました。
- ㉕ それからなにをしましたか。

じ〔時〕 (15)

- ① じゅういちじです。
- ④ しちじです。
- ⑫ はちじです。
- ⑮ なんじからなんじまでペンキょうしましたか。
- ⑯ なんじからなんじまでペンキょうしましたか。
- ⑳ くじからじゅういちじまでペンキょうしました。
- ㉑ くじからじゅういちじまでペンキょうしました。
- ㉒ なんじにねましたか。
- ㉓ じゅういちじにねました。
- ㉔ けさなんじにおきましたか。
- ㉕ しちじにおきました。



- ④③ なんじにりょうをでましたか。
- ④④ はちじにでました。
- ④⑨ なんじにがっこうにつきましたか。
- ⑤⑩ くじじっぷんまえにつきました。

じかん〔時間〕(1)

- ④② じかんがありませんでした。

しち〔七〕(2)

- ④ ④ しちじです。
- ③② しちじにおきました。

じっ, じゅう〔十〕(1)

- ⑤⑩ くじじっぷんまえにつきました。

じゅういち〔十一〕(3)

- ① ① じゅういちじです。
- ②⑥ くじからじゅういちじまでべんきょうしました。
- ③⑩ じゅういちじにおました。

しょくどう〔食堂〕(1)

- ③⑤ しょくどうであさごはんをたべました。

しんぶん〔新聞〕(1)

- ④⑩ しんぶんはよみましたか。

すうがく〔数学〕(1)

- ②④ すうがくのべんきょうをしました。

それから(1)

- ③③ それからなにをしましたか。

たべ, たべる〔食べる〕(5)

- ⑦ ⑦ まえださんはパンをたべます。
- ⑩ ⑩ ごはんをたべます。
- ③⑤ ③⑤ しょくどうであさごはんをたべました。
- ③⑥ ③⑥ ないをたべましたか。

③⑦ パンをたべました。

ちかく〔近く〕(1)

④⑧ がっこうのちかくでおりました。

つき、つく〔着く〕(2)

④⑨ なんじにがっこうにつきましたか。

⑤⑩ くじじっぶんまえにつきました。

で、でる〔出る〕(3)

①⑪ まえださんはりょうをでます。

④⑬ なんじにりょうをでましたか。

④⑭ はちじにでました。

で(7)

(1)①⑭ まいあさここでバスにのります。

③⑮ しょくどうであさごはんをたべました。

④⑰ どこでバスをおりましたか。

④⑱ がっこうのちかくでおりました。

(2)①⑳ まえださんはバスでがっこうへいきます。

④㉑ なんてがっこうへきましたか。

④㉒ バスできました。

です(3)

① じゅういちじです。

④ しちじです。

⑫ はちじです。

テレビ(1)

②⑲ テレビをみましたか。

どこ(1)

④⑳ どこでバスをおりましたか。

なに〔何〕(3)

④㉓ まえださん、ゆうべなにをしましたか。

㉔ それから**なに**をしましたか。

㉕ **なに**をたべましたか。

**なん**〔何〕(9)

(1)㉖ **なん**のべんぎょうをしましたか。

㉗ **なんで**がっこうへきましたか。

(2)㉘ **なん**じから**なん**じまでべんぎょうしましたか。

㉙ **なん**じから**なん**じまでべんぎょうしましたか。

㉚ **なん**じにねましたか。

㉛ **けさなん**じにおきましたか。

㉜ **なん**じにりょうをでましたか。

㉝ **なん**じにがっこうにつきましたか。

㉞ りょうからがっこうまで**なん**ぶんかかりましたか。

**に** (12)

(1)㉟ まいあさここでバス**に**のります。

㊱ バス**に**のります。

㊲ きょうしつ**に**はいります。

㊳ **なん**じにがっこう**に**つきましたか。

(2)㊴ **なん**じにねましたか。

㊵ **じゅういち**じにねました。

㊶ **けさなん**じにおきましたか。

㊷ **しち**じにおきました。

㊸ **なん**じにりょうをでましたか。

㊹ **はち**じにでました。

㊺ **なん**じにがっこう**に**つきましたか。

㊻ **くじ**じ**ぶん**まえ**に**つきました。

**ね、ねる**〔寝る〕(4)

㉑ まえださんは**ね**ます。

㉒ かとうさんはまだ**ね**ません。

- ⑳ なんじに**ね**ましたか。  
㉑ じゅういちじに**ね**ました。

**の** (3)

- ㉒ なんの**べんきょう**をしましたか。  
㉓ すうがく**の**べんきょうをしました。  
㉔ がっこう**の**ちかくでおります。

**のみ、のむ**〔飲む〕(4)

- ㉕ ミルクを**のみ**ます。  
㉖ かとうさんはみそしるを**のみ**ます。  
㉗ コーヒーを**のみ**ましたか。  
㉘ いいえ、ミルクを**のみ**ました。

**のり、のる**〔乗る〕(2)

- ㉙ まいあさここでバスに**のり**ます。  
㉚ バスに**のり**ます。

**は** (10)

- (1)② まえださんは**ね**ます。  
③ かとうさんは**まだ**ねません。  
⑤ まえださんは**おき**ます。  
⑥ かとうさんは**まだ**おきません。  
⑦ まえださんは**パン**をたべます。  
⑨ かとうさんはみそしるを**のみ**ます。  
⑪ まえださんは**りょう**をでます。  
⑬ まえださんは**バス**でがっこうへいきます。  
⑮ **バス**は**まだ**きません。  
(2)④ しんぶんは**よみ**ましたか。

**はいり、はいる**〔入る〕(1)

- ⑳ きょうしつには**はいり**ます。

**バス** (8)

⑬ まえださんはバスでがっこうへいきます。

⑭ まいあさここでバスにのります。

⑮ バスはまだきません。

⑯ バスがきました。

⑰ バスにのります。

⑱ バスをおります。

⑲ バスできました。

⑳ どこでバスをおりましたか。

#### はち〔八〕(2)

⑫ はちじです。

⑬ はちじにできました。

#### パン(2)

⑦ まえださんはパンをたべます。

⑧ パンをたべました。

#### ぶん, ふん〔分〕(3)

⑤⑥ くじごじ**ぶん**まえにつきました。

⑦⑧ りょうからがっこうまでなん**ぶん**かかりましたか。

⑨⑩ ごじ**ぶん**かかりました。

#### へ(2)

⑬ まえださんはバスでがっこうへいきます。

⑭ なんてがっこうへきましたか。

#### べんきょう〔勉強〕(5)

⑫⑬ **べんきょう**をしました。

⑭⑮ なんの**べんきょう**をしましたか。

⑯⑰ すうがくの**べんきょう**をしました。

⑰⑱ なんじからなんじまで**べんきょう**しましたか。

⑲⑳ くじからじゅういちじまで**べんきょう**しました。

#### まいあさ〔毎朝〕(1)

⑭ まいあさここでバスにのります。

まえ〔前〕(1)

⑤⑩ くじじっぶんまえにつきました。

まえだ〔前田〕(6)

② まえださんはねます。

⑤ まえださんはおきます。

⑦ まえださんはパンをたべます。

⑪ まえださんはりょうをでます。

⑬ まえださんはバスでがっこうへいきます。

⑰ まえださん、ゆうべなにをしましたか。

ました(30)

(1)⑬ バスがきました。

⑲ ベンギョウをしました。

⑳ すがくのベンギョウをしました。

㉒ くじからじゅういちまでベンギョウしました。

⑳ じゅういちじにおました。

㉒ しちじにおきました。

㉔ かおをあらいました。

㉕ しょくどうでごはんをたべました。

㉗ パンをたべました。

㉙ いいえ、ミルクをのみました。

㉛ はちじにでました。

㉝ バスできました。

㉟ がっこうのちかくでおりました。

㊱ くじじっぶんまえにつきました。

㊳ ごじっぶんかかりました。

(2)㉛ まえださん、ゆうべなにをしましたか。

㉝ なんのベンギョウをしましたか。

- ②⑤ なんじからなんじまでべんきょうしましたか。
- ②⑦ テレビをみましたか。
- ②⑨ なんじにねましたか。
- ③① けさなんじにおきましたか。
- ③③ それからなにをしましたか。
- ③⑥ なにをたべましたか。
- ③⑧ コーヒーをのみましたか。
- ④① しんぶんはよみましたか。
- ④③ なんじにりょうをでましたか。
- ④⑤ なんてがっこうへきましたか。
- ④⑦ どこでバスをおりましたか。
- ④⑨ なんじにがっこうにつきましたか。
- ⑤① りょうからがっこうまでなんぶんかかりましたか。

ます (13)

- ② まえださんはねます。
- ⑤ まえださんはおきます。
- ⑦ まえださんはパンをたべます。
- ⑧ ミルクをのみます。
- ⑨ かとうさんはみそしるをのみます。
- ⑩ ごはんをたべます。
- ⑪ まえださんはりょうをでます。
- ⑬ まえださんはバスでがっこうへいきます。
- ⑭ まいあさここでバスにのります。
- ⑰ バスにのります。
- ⑱ バスをおります。
- ⑲ がっこうまであるきます。
- ⑳ きょうしつにはいります。

ません (3)

- ③ かとうさんはまだねません。  
⑥ かとうさんはまだおきません。  
⑮ バスはまだきません。

ませんでした (3)

- ⑳ いいえ、みませんでした。  
㉑ いいえ、よみませんでした。  
㉒ じかんがありませんでした。

まだ (3)

- ③ かとうさんはまだねません。  
⑤ かとうさんはまだおきません。  
⑮ バスはまだきません。

まで (4)

- (1)⑱ がっこうまであるきます。  
⑤① りょうからがっこうまでなんぶんかかりましたか。  
(2)⑳ なんじからなんじまでべんきょうしましたか。  
㉑ くじからじゅういちじまでべんきょうしました。

み、みる〔見る〕(2)

- ⑳ エレビをみましたか。  
㉑ いいえ、みませんでした。

みそしる (1)

- ⑨ かとうさんはみそしるをのみます。

ミルク (2)

- ⑧ ミルクをのみます。  
⑳ いいえ、ミルクをのみました。

ゆうべ (1)

- ㉑ まえださん、ゆうべなにをしましたか。

よみ、よむ〔読む〕(2)

- ④⑩ しんぶんはよみましたか。



④① いいえ、よみませんでした。

りょう〔寮〕(3)

①① まえださんはりょうをでます。

④③ なんじにりょうをでましたか。

⑥① りょうからがっこうまでなんぶんかかりましたか。

を(20)

(1)⑦ まえださんはパンをたべます。

⑧ ミルクをのみます。

⑨ かとうさんはみそしるをのみます。

⑩ ごはんをたべます。

②① まえださん、ゆうべなにをしましたか。

②② べんきょうをしました。

②③ なんのべんきょうをしましたか。

②④ すうがくのべんきょうをしました。

②⑦ テレビをみましたか。

③③ それからなにをしましたか。

③④ かおをあらいました。

③⑤ しょくどうであさごはんをたべました。

③⑥ なにをたべましたか。

③⑦ パンをたべました。

③⑧ コーヒーをのみましたか。

③⑨ いいえ、ミルクをのみました。

(2)①① まえださんはりょうをでます。

①⑧ バスをおります。

④③ なんじにりょうをでましたか。

④⑦ どこでバスをおりましたか。

## 資料2. シナリオ全文

題 名 日本語教育映画  
「なにをしましたか」——動詞——  
企 画 国立国語研究所  
制 作 日本シネセル株式会社  
フィルム 16m/m E Kカラー・スタンダード  
巻 数 全1巻  
上映時間 5分  
現 像 所 東映化学  
録 音 アオイスタジオ  
完 成 昭和51年3月31日

### 制作スタッフ

制 作 静 永 純 一  
制作担当 神 崎 晴 之  
脚 本 前 田 直 明  
演 出 前 田 直 明  
演出助手 辛 島 徹 夫  
撮 影 相 良 国 康  
撮影助手 市 川 哲  
照 明 伴 野 功  
音 楽 吉 田 征 雄  
録 音 堀 内 戦 治 (アオイ S T)  
ネガ編集 亀 井 正  
配 役 前 田 (学生) 水 上 哲  
加 藤 (学生) 高 遠 岳  
教 師 齋 藤 隆  
(ナレーター) 関 根 信 昭

カット	画 面	セ リ フ
1	メインタイトル 日本語教育映画	
2	テーマタイトル なにをしましたか ——動詞——	
3	学生寮 学生，前田・加藤の居室全景	
4	前田，机に向かって勉強して いる	
5	時計11時	①じゅういちじです。
6	勉強をやめ，背のびをする前 田，立ちあがって行く	
7	パジャマの前田，ベッドへ	②まえださんはねます。
8	勉強している加藤	③かとうさんはまだねませ ん。
9	朝	
10	時計7時	④しちじです。
11	起きてベッドを出る前田	⑤まえださんはおきます。
12	加藤はまだ寝ている	⑥かとうさんはまだおきませ ん。
13	洗面所の前であいさつを交わ してすれちがう二人	
14	食堂で食事をしている前田	⑦まえださんはパンをたべま す。
15	加藤，前田の隣に食事を持っ てきて座り，食べはじめる	⑧ミルクをのみます。 ⑨かとうさんはみそしるのを みます。
16	食事の終わった前田，立ちあ がって行く	⑩ごはんをたべます。
17	新聞ラックに近寄る前田，腕 時計をみて，そのまま通り過 ぎる	

18	自室で学校へ行くしたくをしている前田	
19	寮の玄関から出てくる前田、時計をみる	⑪まえださんはりょうをでます。
20	腕時計 8時	⑫はちじです。
21	バスの停留所に向かう前田	⑬まえださんはバスでがっこうへいきます。
22	バスの停留所に立ち、バスを待つ前田、腕時計を見る	⑭まいあさここでバスにのります。
23	バスが来て止まる	⑮バスはまだきません。
24	バスに乗る前田	⑯バスがきました。
25	学校の前のバスの停留所 バスから学生たちが降りて来る その中に前田がいる	⑰バスにのります。
26	学校へ向かって歩く前田	⑱がっこうまであるきます。
27	教室に向かう前田	
28	教室に入る前田 腕時計をみる	⑳きょうしつにはいます。
29	腕時計 9時10分前	
30	教室での授業 (過去の部分はスチール構成) 教室、教師から前田へ	教師「㉑まえださん、ゆうべなにをしましたか。」
31	(スチール) 勉強している前田	前田「㉒べんきょうをしました。」
32	(スチール) 数学の教科書	教師「㉓なんのべんきょうをしましたか。」 前田「㉔すうがくのべんきょうをしました。」
33	教師	教師「㉕なんじからなんじまでべんきょうしました。」

- |    |  |  |
|----|--|--|
| 34 | (スチール) 時計9時, 時計<br>11時, ライトを消す前田         | か。」<br>前田「②⑥くじからじゅういち<br>じまでべんきょうしま<br>した。」                                |
| 35 | (スチール) テレビ                               | 教師「②⑦テレビをみました<br>か。」<br>前田「②⑧いいえ, みません<br>でした。」                            |
| 36 | (スチール) ベッドの前田,<br>時計11時                  | 教師「②⑨なんじにねました<br>か。」<br>前田「③⑩じゅういちじにねま<br>した。」                             |
| 37 | (スチール) ベッドの中で時<br>計をみる前田<br>時計7時         | 教師「③⑪けさなんじにおきま<br>したか。」<br>前田「③⑫しちじにおきまし<br>た。」<br>教師「③⑬それからなにをし<br>ましたか。」 |
| 38 | (スチール) 洗面所の前田,<br>加藤とすれちがう<br>食堂で食事をする前田 | 前田「③⑭かおをあらいま<br>した。<br>③⑮しょくどうであさご<br>はんをたべました。」                           |
| 39 | (スチール) 食べる前田                             | 教師「③⑯なにをたべまし<br>たか。」   |
| 40 | (スチール) 食事, パン                            | 前田「③⑰パンをたべまし<br>た。」<br>教師「③⑱コーヒーをのみ<br>ましたか。」<br>前田「③⑲いいえ, ミルクを<br>のみました。」 |
| 41 | (スチール) 新聞と前田, 腕<br>時計を見る                 | 教師「④⑰しんぶんはよまし<br>ましたか。」<br>前田「④⑱いいえ, よみ<br>ませんでした。<br>④⑳じかんがありません          |

42	(スチール) 寮の玄関を出る 前田, 腕時計 8 時	でした。」 教師「④③なんじにりょうをで ましたか。」
43	(スチール) バスを待つ前 田, 乗りこむ	前田「④④はちじにでました。」 教師「④⑤なんでがっこうへき ましたか。」
44	(スチール) バスを降り, 教 室へ向かう前田	前田「④⑥バスできました。」 教師「④⑦どこでバスをおりま したか。」
45	(スチール) 教室へ入る前 田, 腕時計 9 時10分前	前田「④⑧がっこうのちかくで おりました。」 教師「④⑨なんじにがっこうに つきましたか。」
46	前田	前田「④⑩くじじっぶんまえに つきました。」 教師「④⑪りょうからがっこう までなんぶんかかりま したか。」
47	前田	前田「④⑫ごじっぶんかかりま した。」
48	教師 教室全景	
49	企画・制作タイトル 企画 国立国語研究所 制作 日本シネセル株式会社	

昭和54年3月

国立国語研究所

〒115 東京都北区西が丘3-9-14  
電話東京(900)3111(代表)

印刷所 神谷印刷株式会社  
電話(912)2571